

## 捕鯨問題に一石

# 解体現場の 写真集出版

世界で捕鯨の是非をめぐる議論が続く中、写真家の小関と四郎さん(76)がマッコウクジラの解体現場などを撮影したモノクロ写真集「クジラ解体」が30日出版された。1988年に商業捕鯨が規制される前の写真が中心で、日本の捕鯨文化を伝える貴重な資料として注目されそうだ。



①砂浜でクジラを解体する捕鯨会社の作業員(写真集「クジラ解体」より)  
②30日に春風社から出版された写真集「クジラ解体」



を振り返る。

「捕鯨の是非を頭だけで判断する前に、ありのままを見てほしい。議論る議論のたたき台にして

を殺して食べることで人間は生きていくという事

景もあらためて撮影、写打ち切るなど、混乱が続いている。

伝統文化を紹介

江戸時代のクジラ漁師を描いた小説「くじら組」の著作がある作家山本一力さんの話 19世紀の米国などによる捕鯨は鯨油を採るために皮だけを使い、クジラを絶滅させかねないほどに追い込んだ。一方、日本の伝統的な捕鯨には「命をあやめがクジラにどう向き合っ以上、血の一滴まで無駄にしない」という、信品だ。

仰に近い文化がある。自分の命と引き換えにする覚悟でクジラという大型動物に立ち向かい、食べるために必要な分だけを殺し、肉、骨、皮、ヒゲまでもすべて大事に使って来た。写真集を見たが、細かい説明がなくても漁師たちのクジラへの敬意が伝わってくる。日本人

A4判208ページですしり重い。写真集の目玉となる陸での解体風景は、千葉県南房総市の和田浦港で86年に撮影。「解剖さん」と呼ばれる捕鯨会社の作業員らが、なぎなたのような長い柄の大刀で、つやつやと黒光りするクジラの頭や、分厚い脂肪の層を切り落とす光景などを生々しく伝

撮影の  
小関さん

## ありのまま見て議論を

するための役に立つのなほしい」

「商業捕鯨中止が近いから出版の意義がある」と話す。数年前に写真の存在を開かれているツチクジラ「歴史的な和解」に失敗。反捕鯨団体「シー・パード」の妨害を受け、日本側は今シーズン

「ほかの生き物 捕鯨にまつわる現代の風の南極海での調査捕鯨を1)3168。」

昨年6月の国際捕鯨委員会総会は、日本など捕鯨支持国と反捕鯨国のとコメントしている。税込み1万5750円。全国の書店を通じて注文できる。問い合わせ先は春風社、045(26

大規模な商業捕鯨に反対している環境保護団体グリーンピース・ジャパンは写真集について「日本の伝統的な捕鯨文化を否定するわけではない」とコメントしている。